
悪魔とニートとその読者と

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔とニートとその読者と

【Nコード】

N4936J

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

「無職青年」というハンドルネームを用い、「ニートに小説は書けるか?」というブログを運営する谷垣直人は、その名の通りニートである。しかし、彼は悪魔につけ狙われていた。谷垣がブログを開設した直後、同じくニートで高校中退の関根哲夫と私大法学生の木杉勉という二人の読者がつくが、実は関根と木杉は悪魔に操られ、谷垣を攻撃するように仕向けられていた! 谷垣、関根、木杉の運命は? 悪魔の企みは結実するのか?

第一章 ひとりで突っ込む男、関根哲夫

（何が「ニートは小説を書けるか？」だ。ニートに小説なんか書けるわけないだろ。笑わせやがって）

関根哲夫はパソコンの画面を前に、今日開設された、無職青年なる男が書いたブログのタイトルを見て、そう心の中で毒ついた。

（無職青年て何だよ？ そのまんまじゃねえか。何の捻りもねえ。こいつ今何歳？ 今まで何やってたの？ こいつ、どこの大学出てねえの？ マジでどこ？ やっぱ底辺大学か？ ニートやってる奴が、まともな大学、有名私大なんて出てるはずねえよな。・・・・。おいおい無職青年さん、あんた統失なのかよ？ 基地外じゃないか。しかも前科もち。終わってんよあんた。ニートで統失で前科者。いいとこ何にもねえじゃん。オカルト傾向て何よ。こんなんじゃない、小説書くのうまくいくわけねえだろ。

・・・こいつ何がしたいんだ。・・・小説書き方本何冊か読んでも、何の役にも立たなかったらしい。こいつの経歴見れば、誰だってわかるよ。つかさ、読む前に気づけ、お前のようなニートには夢も希望も才能も何にもないんだってな。

・・・ニート小説？ なになに・・・。確かにウケル話だが、これ会話しかのってねえじゃん。これを普通は小説とは言わんだろ、そんなのもわかんないの。さすがは無職青年だな。

・・・記事はこれで終わりか。ほんとこいつ大したこと書かねえな。スカスカだよ。こんな調子のブログなら、見ることもないだろう。

あばよ、能無し。たぶん童貞だな。）

関根哲夫は無職青年が童貞であることを半ば確信してブラウザを閉じた。

第二章 姦計を企む悪魔

無職青年こと、谷垣直人は椅子に座り、小説の構想を練っていた。その姿を魔界から観察している者がいた。悪魔である。

（いくら考えても面白い小説は書けないぞ、谷垣直人。なぜなら、この俺らがお前の思考を妨害しているのだからな）

悪魔がいるのは薄い暗闇の中である。わずかに枯れた木々が立ち並ぶ様子を窺い知ることができる。しかし、これは悪魔がその魔力によって作り出した世界で、魔界は本来は何もない世界なのだ。

悪魔の妨害工作が功を奏し、谷垣は席を立ち、炬燵の中に入ったかと思うと、座布団を枕にして横になってしまった。

（そうだ。そうやって無為に時間を過ごしているのがお前らしい。無能こそがお前の本質なのだ。もつとも、お前をそうしたのは俺らだがな）

寝ている谷垣を見ているのが飽きてきた悪魔は、今後どうやってこのニートを苦しめるか、計画を立てることにした。

（俺の声は、奴にはもう通じない。薬を飲んでいるからな。人間の医学とやらも馬鹿には出来ん。俺らの声をほとんど遮る力もっているのだから。……。そうになると、やはり、手頃な人間を駒として操り、直人を攻撃させるしかないな）

これまで悪魔は、谷垣の母親や小学校・中学校・高校・大学の何人かの同級生を操り、彼を精神的にも肉体的にも苦しめてきた。母

親をヒステリックにし、「あんたなんか産まなきゃよかったのよ」などという暴言を吐かせたり、同級生を使って彼の持ち物を壊したり隠したり、殴る蹴るの暴力を加えたりした。また悪魔は、彼を被害者だけの存在にはしなかった。ときには彼を怒りを爆発させ、家庭内暴力を振るわせた。そして最近では、二十四時間彼に悪口を聞かせたかと思うと、彼を興奮状態にして暴行事件を起こさせた。いわゆる統合失調症もまた悪魔の仕業であつたのである。

（ふふ、それにしても馬鹿な奴だ。ブログなんぞ開設して、どうするつもりだ。いくら暇だからといって他にすることがあるだろうに。無駄なことを。しかしまあ、それも俺らがやらせたことだがな。くく。……さて、手駒となる人間を探すとするか）

悪魔は瞬時に日本人でパソコンを扱うことができる人間を探し出し、頭の中でリストアップした。

（見つけたぞ。こいつを使うとしよう。直人の苦しむさまが見ものだな）

第三章 差別表現に憤る法学生、木杉勉

木杉勉は某有名私大の法学部の大学一年生である。剣道部員でもある。剣道は幼い頃から習っていて、小中高大と続けてきた。また、部活動だけでなく、生徒会活動にも参加、中学高校では生徒会長を務めた。彼の高校は文武両道の進学校であった。

大学の授業を終えて帰宅すると、すぐに自室に行って、パソコンを立ち上げた。早速インターネットにつなぎ、あるブログランキングの小説ブログランキングにアクセスする。木杉は小説を読むのが好きで、よくこのランキングに載ったブログの小説を読んでいた。どんなジャンルの小説でも読むことにしている。見聞を広めるためというのもあるし、読んでみないと面白いかどうかわからないからという理由もあった。

と、気になるブログを発見した。

（「ニートに小説は書けるか？」だって？）

しかし、木杉がもっとも注目したのは、ブログのタイトルではなかった。

「基地外なんて差別表現を使うな！」

木杉は思わずパソコン画面を前に怒鳴ってしまった。精神障害者に対する差別語がそのブログの記事に書かれていたからだ。

（こんな差別表現を使うことは、間違っている。………本当に統合失調症の人なんだろうか？ だとしたら、おかしい。自分た

ちを差別する言葉を安易に使うのは、どうしてだろう？ 仮にこの人が本当に統合失調症だとしても、そういう人は差別表現に抗議こそすれ、自分が使うなんて言語道断だ。当の統合失調症の人が使うのは、普通の人が使うよりも罪が重い）

彼は眉間にしわを寄せながら、キーボードを打ち始めた。この無職青年とやらに一言注意することにしたのである。

（こういう人は、一度誰かがきちんと言ってあげなければいけないんだ）

二度とこんな言葉を使ってほしくない。精神障害者であれば、なおさらだ。この人はいったい何を考えているのかと思いつながら、手を動かし続けた。

悪魔は木杉が自分の思い通りに動いていることに満足していた。

（けっこうけっこう。この手の生真面目な人間は説教役に適任だ。こういうタイプの人間は、見ているだけで面白い。赤の他人に話せばわかる、思いが通じると確信しているところがあるからな。人の理性というものを信仰しているわけだ。・・・・・・それにしても、この木杉勉という男、己が俺に操られているとは、露ほども思っていないらしい。まったくおめでたいな、人間という奴は。）

第四章 ニートの日常

「もう十一時よ。起きなさい、直ちゃん」

ハンドルネーム無職青年、本名谷垣直人は午前十一時、母親に叩き起こされた。谷垣は二重顎の丸顔に坊主頭、身長は一七〇センチ、体重は七五キロの肥満体である。とりあえず洗顔し、寝ぼけた思考のまま、しばらくぼーっと過ごし、テレビをつける。十一時半のニュースを見るためだ。彼は、いつもこの時間、TBSのニュース番組を見ることに決めていた。まだ完全には目が覚めないため、ほとんど内容を理解しないのも毎度のことだ。

ニュースを見終わり、今日は朝食を何にしようかと考える。朝食といっても、もう十二時をまわっていた。谷垣は冷蔵庫を開け、鮭ほぐしの缶を手にとった。鮭茶漬けにするためである。

朝食をすませると、今度は産経新聞の朝刊を読み始めた。といっても、ぱらぱらとめくりながら見出しだけを追いかけるだけだ。

（目玉おやじの人、死んだのか。郷里大輔さんも自殺したっていうし。……。そういえば、去年は臼井儀人さんも事故死したな。アニメ関係者の相次ぐ死。これは、悪魔の犯行であるのかもしれないな）

谷垣は、統合失調症の幻聴に苦しめられた経験から、悪魔の存在を確信し、悪魔がこの世界を創造し、支配しているという考えにとりつかれていた。

産経新聞を畳むと、自室に移動し、パソコンのスイッチを押し、

アニメ動画のアップを専門としている動画サイトを開く。テレビアニメ「怪談レストラン」を視聴するためである。谷垣はこのアニメに出演している、白石涼子、平田広明、浅野真澄のファンであった。

彼は数ある動画の中でも、「Say Move」、略して「SM」という動画が好きだった。高画質高音質で、何といっても、視聴者が自由にコメントを送信することができる点が特色である。送信されたコメントは画面の上の方に表示され、右から左へと流されていくようになっていた。たまに面白いコメントがあるので、そこが谷垣は気に入っていた。

(・・・しかし、毎週見ているにもかわらず、そんなに面白くないんだよな。はつきりいって、子供向けアニメだと思うし。お化けギャルソンのキャラデザがいくらか)

毎回欠かさず見ているにもかかわらず、それが谷垣の「怪談レストラン」に対する評価だった。なぜ見続けているからというと、やはり、白石、平田、浅野のファンであるからという理由である。しかし、いくら好きだからといっても、その声優が出演しているすべての作品を見ようとは思わなかったし、具体的にどこが好きかと聞かれれば、声が好きとくらいしか答えられず、谷垣の好きとは、その程度のものである。

視聴を終え、お気に入り登録しておいた自分のブログにアクセスした。

(一件コメントがついているな。どれどれ・・・)

第五章 忍び寄る魔の手（前書き）

第五章 忍び寄る魔の手

内容があまりに下らな過ぎて、一度はもう来るのをやめようかと考えていた関根哲夫であったが、気がつけば、「ニートは小説を書けるか？」を訪れていた。

（何でまた来ちゃったんだろう。何の中身もないブログのはずなのに。）

関根はまだ、自分が悪魔の操り人形に過ぎないことなど、知る由もなかった。

（お？ こんなカスブログにコメントがついてんじゃん。コメントする奴がいるとは意外）

コメントをつけた者は、自らを「東京法学生」と名乗っていた。

「初めまして。単刀直入に申し上げます。貴方は、基地外が精神障害者の方に対する差別的表現だということを、もちろん、知ってますよね？ もし貴方のとてもつまらないブログを精神障害者の方が見たとしたら、どう思うと思いますか？ 気分を悪くするに決まっていますよね。」

貴方は、どうやら統合失調症の方らしいですけど、私は嘘だと思っています。そんな病気の人が、自分たちに対する差別語を使うわけがないからです。

少なくとも、私の周りには、基地外などという差別表現をする人は、一人もいません。

最後に、貴方に次のように強く要求します。基地外などという差別表現を即刻削除すること。そして、二度と差別的な言葉を使用しないこと。これは、基地外に限らず、です。わかりましたか？ もういい大人なんだから、それくらいわかりますよね？ ニートだからといって、社会常識を無視・逸脱することが許されるわけではありません。以上です。」

（基地外ニートの癖に、小説を書こうなんて、生意気だ！は、なしか？ だらだらだらだと、読むのが疲れるぜ。一言ですませろよ。基地外を削除しろ、これは命令だってな。俺はこういう人種は苦手だな。なんつうの、そう、お堅い人間って奴だ。そういや、昔いたな、こういうの。学級委員とか、学級委員長とか、生徒会長とか。きつとこの東京法学生というのも、その手の野郎に違いねえ。・・・あー、もういいや。とにかく、基地外ぐらいでがたがた言うなっつうの。んなもん、2ちゃんねるにでも行けば、ごまんと使っているのはいる。それを馬鹿じゃねえのこいつは。・・・それより、無職青年はどうした？ レスせずにスルーか？ ・・・ん？ 何か書いてる）

第六章 基地外の逆襲

「東京法学生さん初めまして宜しくお願いします。コメントありがとうございました。基地外という表現ですが、いったい何が問題なのでしょう？ 私にはわかりかねます。差別的といっても、統合失調症を患っている私が言うのもなんですが、精神障害者を差別して何がいけないのでしょうか？ 私も精神障害者に分類される人間ですが、精神科医は私の症状は軽いと言っています。また、私の母も統合失調症です。母は普通の精神状態のときが多いのですが、ときたま幻聴のせいでヒステリックになることがあります。そういうときの母は嫌いです。手に余るといのが正直な思いです。私は興奮して暴行事件を起こしたことがあります。当然、暴行しているときの自分のことが好きなわけがありません。

私は基地外ですから、基地外呼ばわりされることは仕方がないと思っております。また、基地外に基地外と言って何が悪いのでしょうか？ 差別表現・差別語と呼ばれようとも、私は基地外に差別感情を持っているので、しょうがありません。自分が統合失調症になったことも嫌で嫌でしょうがなく、健常者のままでおられれば、どんなに幸せかと思えます。

基地外という言葉を読んで、他の精神障害者の方が気分を害されることは当然予想していますが、私は差別主義者なのでしょうがありません。

基地外という表現を削除しろとの要求ですが、到底受け入れることはできません。

あなたは何様のつもりなのでしょう。私はあなたのような自分

が正しいと信じて疑われないような人は嫌いです。説教・折伏がしたければ、どうか他の方にやって下さい。あなたは間違いなくかわりあいになると面倒臭い人間です。もうかわりたくありません。どうかもうここには来ないで下さい。

私が統合失調症であることも、某私大通信教育部法律学科を出ていることも、事実です。信じたくなければ、それでけっこうです。また、あなたの周りには基地外という言葉を使う人間はひとりもないそうですが、それはあなたがこれまでよほどお上品な環境で育ってきたからか、あなたにいろいろ説教言われるのが嫌でいい子ぶっていたかのどちらかでしょう。

あなたのために、貴重な時間を浪費してしまいました。どうしてくれるんですか、まったく。これ以上時間を無駄にしたくないので、くどいですが、もう二度とここには来ないで下さい。」

無職青年の長いコメントを読み終えた関根は、

「頭の悪そうな奴が書くコメントだな」

と思わず呟いた。

（こいつもだらだらとなげえな。だらだらにはだらだらという、だらだら対決のつもりなのか。・・・・基地外の癖に同じ基地外を差別するとは、なかなかおもしれえじゃねえか。・・・・そうだ。こいつを2ちゃんに晒すのはどうだろう？・・・・面白くなりそうだ）

関根はさっそくお気に入り登録しておいた2ちゃんねるの「痛いブログスレ」にアクセスし、書き込んだ。

「基地外の分際で同じ基地外を差別する香具師、発見」

当然「ニートは小説を書けるか？」のURLも書き込んである。

（おおっと忘れてた。晒されたことを本人に教えとかないとな。ここでは「善意の人」とでも名乗っておけばいいや）

「無職青年さん、ここが2ちゃんねるのスレに晒されています。荒らしが来るかもしれません。気を付けてください」

（これでいい。さあて、どうする、無職青年？）

第七章 呪術ニート

谷垣直人はパソコンが起動するまでの間、昨日見たテレビアニメについて考えていた。

（『ダンス・イン・ザ・ヴァンパイアバンド』はほんと微妙だよな。主演の悠木碧は別に好きでもないし。中村悠一も好きじゃない。『銀魂』で月詠を演じた甲斐田裕子さんが出てるんだったな。しかし、何といっても、ジェレミア卿こと成田剣さんが出るのが楽しみだ。でも、まだ一回しか出てないんだよな。あとは、『BLOOD+』を主演した喜多村英梨、『コードギアス』でヴィレッタ役の渡辺明乃が出てるんだが、この二人も別にファンじゃない。……。中田譲治さんも出番少ないし。斎藤千和さんは『化物語』戦場ヶ原ひたぎのときの声がよかったな。『銀魂』近藤勲役の千葉進歩も出てるが。近藤役の方が面白くていい。……。こうなれば、成田さんは悪役のようなから、成田さんの悪役ぶりに期待するとするか。……。昨日の『銀魂』は歌舞伎町猫編だったな。感動要素があったが、俺はそういうのは求めちゃいない。俺が求めているのはどこまでもギャグ要素だというのに。……。ギャグといえば、猫国王の話とラストで桂と銀時が土の中にいたのと、近藤がゴリラのままだったところくらいか、面白かったのは。そういや、ホーイチ役で秋元羊介さんが出てたんだった。『攻殻機動隊』での内務大臣役の方がよかったかな）

いつもの通り、アニメ動画サイトにて、テレビアニメを視聴する。今日見るのは『デュラララ!!』だ。

（しかし、『デュラララ!!』は声優陣が豪華だよな。主役の豊永利行は知らんが、『デス・ノート』の宮野真守、『流星の双子』『

パンドラハーツ』の花澤香菜、『コードギアス』ルルーシュ役の福山潤、小林沙苗、『黒執事』セバスチャン役小野大輔、神谷浩史、黒田崇矢、中村悠一、『ファントム』アイン・エレン役の高垣彩陽、そして、ナレーションに『ファントム』『CANAN』沢城みゆき)

数あるアップされた動画の中で、今回もSMにて視聴しはじめたのだが、開始早々、気になる。コメントを目にした。

(「ネタバレコメント有り 非表示推奨」だと? 仕方ないな。笑えるコメントがあるかもしれないが、ネタバレは困る。ここはコメントを犠牲にするしかない)

次回予告が流れたところで、『デュラララ!!』の動画は終わった。

(今回は福山さんの出番が多そうだ。今回はサイモン役の黒田さんがナレーションだったな。沢城さんのナレーションがかっこよかったのにな。今週で面白かったシーンは「ヨーヨー」とラップを口ずさみながら出てきたチンピラの登場場面だ。 さてと、ブログがどうなってるか、見に行くか)

谷垣は目を疑った。自分ブログが2ちゃんねるに晒されていることを知らせるコメントがあったからである。

(いったい何者だ? 俺のブログを晒すなんて。 今のところ、特に荒らされてはいないな。まずは、知らせてくれた人間に感謝のコメントを書かないと。 くそっ。本当に誰の仕業だ? そうか。奴だ、奴の仕業だ。東京法学生、あいつに違いない。あの野郎、ふざけやがって。 ふっふふふ、そっちがそのつもりなら、俺にだって考えがある)

谷垣は机の引き出しを開け、ハサミを取り出した。そして、机の上に置いてあったノートから一枚破くと、そこにハサミを入れた。紙の人形が出来上がった。今度はボールペンで人形に「東京法学生」と縦書きをした。

（完成だ。ふふふふふ、奴め、俺の呪いの力、思い知らせてやる。・
・・・・・死ね、死ね、死ね、死ね・・・・・）

谷垣は紙の人形をハサミで切り刻み始めた。

第八章 悪魔の独白

今日も悪魔は魔界から谷垣直人を終始観察していた。むろん、それだけにとどまらず、谷垣を操作することも忘れなかった。谷垣はといえば、「死ね、死ね」と言いながら一心不乱に自分で作った紙の人形をハサミで細かく切っている。

（谷垣直人、相も変わらずお前は下らないな。呪いの紙人形か。しかも、自分で編み出した呪法ときたか。そんなもので、呪詛が現実のものになると思っているのがお前らしい。俺は悪魔だ。人間どもの願いを叶えてやることも、きなくはない。だが、お前のは叶えてやらん。つまりは、お前のその作業は徒労に終わるということだ。・・・・・直人、お前はこれから木杉勉と関根哲夫という二人の人間のために、苛まれることになる。といっても、大した苦しみではない。少し嫌な思いをするだけだ。今のところは、その程度だ。・・・・・谷垣、お前は本当に愚かしい男だが、木杉と関根も同じくらしいの愚かさはもっている。お前ら人間は見ていて飽きることがない。お前らは知らんだろうが、それが人類が魔界から生存を許されている理由なのだ。お前ら人間は、そのことをどれだけ理解しているだろうか。・・・・・谷垣、お前は俺ら悪魔の存在を知っているが、それで何ができるといふわけではない。現に俺らの攻撃から自分を守るのが精一杯だったのだから。お前にできることといえば、鈍感・無神経になることくらいのことだ。お前には、お前ら人間には、俺ら悪魔からの働きに対抗することなど不可能なのだ。なぜなら、俺ら悪魔こそが人類・地球・宇宙の創造主であるから。俺ら悪魔こそ、お前ら人間が神と呼ぶ者）

悪魔は観察対象を谷垣から木杉勉へと移した。木杉は勉強机の前で読書の最中だった。

（木杉よ。いつまで本など読んでいるのだ。それとて、俺らがお前にやらせていることだが。お前はこれからパソコンをやるのだ）

木杉は突然、本を閉じると、パソコンに手をやった。

（よし。あのブログに向え。そしてお前は再び批判コメントを書け。そうだ）

第九章 「東京法学生」再び

木杉勉は小説を読んでいた。村上春樹著『1Q84 BOOK1』である。まだ読み始めたばかりだが、これが面白い。村上春樹の小説はこれまで数冊読んできたが、その中でも、これはかなりの良作に入るのではないかと思う。このまま読み進めるつもりだったが、なぜか唐突にブログ「ニートは小説を書けるか？」のことが脳裏をかすめた。どうして楽しいひと時を過ごしているはずなのに、あんな下らないブログのことを考える羽目になるのか、彼にはわからなかった。それもそのはず、そうするように悪魔に無理やり仕向けられたからである。

とにかく、彼は再び「ニートは小説を書けるか？」へと向かった。

（あれ？ ブログの名前がちょっと変ってる。「廃人ニートに小説は書けるか？」、か。・・・そんなことより、僕のコメントにレスがついていないかどうかを確認しよう）

木杉のコメントには無職青年からの返信があった。それは一目で長文であることが認められた。

（「基地外が何が問題なのでしょう？」、何言ってるんだ、まるでわかってない。・・・「精神障害者を差別して何がいけないのでしょうか？」、差別はいけなさに決まってるじゃないか。・・・「病気のお母さんが嫌い」、なんなんだこの人は。・・・結局、「基地外」を削除しないというのか。僕が何様か？ ただの法学生だよ。別に自分が正しいと信じて疑わないわけじゃないし。説教・折伏がしたいわけでもない。折伏って何だよ。僕が面倒臭い人間？ そんなことあんた以外に言われたことないよ。・・・

僕の周りに基地外を使う人がいないのは、それは僕がこれまでよほどお上品な環境で育ってきたからか、僕にいろいろ説教言われるのが嫌でいい子ぶっていたかのどちらかだって、何でこんなことが言えるんだよ。・・・・・・貴重な時間を浪費というけど、それはこっちのセリフで、本当に無駄骨だったみたいだな。ここまで話が通じないとは。・・・・・・「もう二度とここには来ないで下さい」、誘われたって行きたかないよ、あんたのそこは

「はあ・・・・・・」

木杉はため息をついた。

（これにレスをつけるか。もう来るなって言われてるしな。気が重い。やっぱり基地外なんて言葉を使う人に注意したのがいけなかったんだ。そんな人がまともな人なわけがない）

返信しないまま、ブラウザを閉じようとしたが、思いとどまった。

（だけど、返信しなければ、何だか逃げたみたいで嫌だな。負けたような気にもなるし。・・・・・・こんな差別主義者に負けてはいけない！）

猛然と反論を開始した木杉を尻目に、悪魔は思った。

（俺が操っているのだから、俺の思惑通りになるのは至極当然だが、それでも、これほど気持ちのいいことはないな）

第十章 荒れる世界

関根哲夫はY o u T u b eにアップされている痴音ミク制作の替え歌・K A S N E E Tを聴いていた。

（今度は関根哲夫にご登場願おう）

悪魔が念じると、関根は無職青年が運営するブログを見に行った。また「東京法学生」という人間のコメントがついていた。差別表現を削除しようとしないう職青年を批判する内容だった。

（こいつ、まだやっていたのか。ほんとに物好きな奴だよ。読む気も起きないね。無職青年のレスはなしか。俺と同じで相手にするのがバカらしくて、スルーことにしたんじゃない？・・・もうここはいい。2 c hの痛いブログスレはどうなってんだろ？ここを晒しといたけど、レスがついているといいな）

すかさず2ちゃんねるの「痛いブログスレ」に行く。これもお気に入り登録してあった。

ない。一つもレスがついてない。なぜだ？　こうなりや、俺がレスをつけてやる

しかし、ここで予想外のことが起こった。書き込めないのだ。信じられない画面が関根の目に飛び込んできた。

「ERROR！　アクセス規制中です！！

ここで告知されています。」

関根は頭を掻き耑った。

（アク禁だと？ 馬鹿な。あり得ない。もう書き込めないだど？）

ふいに、絶望感が関根を支配した。だが、次の瞬間、関根の心を満たしたのは、強い怒りだった。

（どうしてこの俺がこんな目に遭わなければならない？ ちくしゅう！・・・・・・これも無職青年の所為だ！ だいたい、同じニートの癖に、小説を書こうなんておこがましいんだよ！）

関根は高校中退のニートであつた。高校を中退したのは、いじめが原因だった。いじめられて以降、ひきこもりとなり、そのまま退学したのである。関根は、ニートではあつたが、同じニートのことを心底蔑視していた。自分だけは他のニートとは違うと思ひたかつたのだ。同族嫌悪を抱いていたのである。

（潰さなきや。あの野郎をつぶさなきやならない）

関根はこれまで、ニートのブログやホームページを見つけたたびに、2ちゃんねるのスレに晒したり、自ら「荒らし」となつてコメント欄や掲示板を荒らしまわり、何件かは閉鎖に迫り込んだことがあつた。

（叩き潰してやる。ブログを閉じさせてやるよ、無職青年。・・・・・・
・・ヒヒヒヒヒヒヒ）

関根は顔を歪ませ、笑つた。「廃人ニートは小説を書けるか？」のコメント欄に何度も何度も荒らしコメントを書き込んでいく。書

き込むたびに、関根の心が満たされていった。満足するまでコメントすると、今まで何度か利用した荒らし依頼掲示板に「廃人ニートは小説を書けるか？」を荒らすように書き込んだ。最後に、荒らし依頼が出されたことを無職青年に報告するためのコメントを残した。

（これでいい。終わりだ、無職青年）

関根の操作を終え、悪魔は思いにふけた。

（なあ関根、同じ人間同士、同じ境遇にある者同士、どうして仲良くできないのだろうか。それは、俺らがお前らを影から動かしているせいだけなのか？）

全宇宙の創造主のひとりたるこの悪魔にも、すぐに答えは出なかった。

第十一章 ニート、本を買う

谷垣直人は物音で目を覚ました。何だか騒がしい。母親が何か喋っている。

「直ちゃん、代引きだって。また何か頼んだの？ あたしが払っておくわ」

どうやら本が届いたらしい。おそらく、ブックオフオンラインで代引き注文したアニメノベライズ『ガサラキ』だろう。『ガサラキ』は谷垣が熱狂的に愛してやまないテレビアニメの一つだ。一九九八年にサンライズというアニメ会社が制作したリアルロボットアニメと伝奇アニメが融合したテレビアニメで、谷垣はその世界観をこよなく愛好していた。中でも、『ガサラキ』に悪役で出演している高田裕司という声優が好きだった。美声という言葉は、高田のために存在しているといっても過言ではない、と谷垣は思っていた。その高田も二〇〇八年は『コードギアス 反逆のルルーシュR2』藤堂鏡志朗役、『名探偵コナン』大和敢助役などに出演したきり、とうとう二〇〇九年にはテレビアニメに一度も出演しなかった。谷垣などは、高田のために、普段は見ない『名探偵コナン』を視聴したほどだ。それだけ高田のファンであるだけに、谷垣にとって、昨年の出演作が一作もないということは、残念で仕方がなかった。

（そろそろ『ガサラキ』の漫画本が届く頃だな）

谷垣は小説四冊、DVD BOXを購入するだけでなく、漫画本四冊も古本屋に注文していた。

遅い朝食をすませた谷垣は近所に二軒ある本屋のうちの二軒に向かった。谷垣は毎日二軒の本屋をまわるのが日課になっていた。まわるのは漫画、小説、歴史本のコーナーと決まっていた。

吉野匠・望月淳『忘却の霸王 ロラン』、片岡人生・近藤一馬『デッドマン・ワンダーランド 7』、めいびい『黄昏乙女Xアムネジア 2』、甲田学人『夜魔 怪』を購入し、そのまま寄り道せずに帰宅した。

（ちっ。失敗したな。望月淳はイラストを書いているだけか。まあいいか。どうせ俺の金じゃないし）

漫画だと思って買った『忘却の霸王 ロラン』が小説だったのだ。

（『Crimson-Shell』『Pandora Hearts』のしばらく佇んでいると、チャイムが鳴った。アマゾンで購入した本が届いたのだ。配達員は大きな段ボールを抱えている。支払いを済ませ、ドアを閉じる。

『レトリック事典』、『人物表現辞典』、『オカルトの事典』、『悪魔の事典』、『悪魔事典 (Truth In Fantasy事典シリーズ)』、『例解 慣用句辞典―言いたい内容から逆引きできる』、『類語国語辞典』、『日本語修辞辞典』。全部で八冊だ。ぱらぱらめくる。

（ううむ。また無駄遣いしたな。役に立ちそうなのは、『オカルトの事典』、『悪魔の事典』、『悪魔事典 (Truth In Fantasy事典シリーズ)』、『例解 慣用句辞典―言いたい内容から逆引きできる』、『類語国語辞典』だけか。一万三千百円無

駄にした。ま、いいや)

谷垣は気を取り直し、パソコンをすることにした。

第十二章 ニート、アニメ鑑賞をする

谷垣直人は今日はテレビアニメ『聖痕のクェイサー』、『COBRA THE ANIMATION』、『テガミバチ』、『鋼の錬金術師』を視聴するつもりだった。

(……『聖痕のクェイサー』、か。主演の三瓶由布子は確かにいい声をしている。聞いていてかつこいと思う。他にも、『聖剣の刀鍛冶』の藤村歩・豊崎愛生、『二十面相の娘』平野綾、『Pandora Hearts』川澄綾子、『銀魂』『Phantom Requiem for the Phantom』千葉進歩が出演している。まだ出てきてないが、花澤香菜、高垣彩陽、大川透も出演するらしいな。……授乳アニメと聞いていたが、規制で問題のシーンはやらないつもりのようなのだ。別にそれを期待して見ているわけではないが、規制の所為で何が何だかわからないシーンもあるからな、このアニメ)

平野綾が声を当てているキャラクターが登場したあたりで、終了した。

(可でも不可でもなく、どうということもないアニメだったな。……次は『COBRA』か。これも何だかなあ。内田直哉さん、坂本真綾さん、榊原良子さんが出ているから見ているんだが……。どうしてこうも女性キャラが過激なファクションをするんだろう。露出度が高いというか。坂本さんが演じているシークレットなんか、この前裸になってたな。まあ、ギャグアニメとして見ればいいか。これは突っ込みながら笑うアニメだろ、おそらく……。しかし、エンディングが終わった後のパペットマペットとマリエのやつは要らん。飛ばしてえ)

何だかんだ思いながらも、結局これも最後まで見た。

(……『テガミバチ』。沢城みゆきさんのシヨタ声が聞けるアニメだ。これにも藤村歩が出てるんだった。『聖剣の刀鍛冶』『聖痕のクェイサー』の藤村よりも、ニッチの藤村の方が好きだな。ロリ藤村といわけだ。はつきりって、もはや俺はニッチのためにこのアニメを見ているといい。あとは、水樹奈々さん、福山潤さん、小清水亜美さんが出ているからか。それと、なぜだか知らないが、『テガミバチ』のSM動画は荒れるのだ。その荒らしは大きな赤字のコメントを何度も送ってくるのだが、他の視聴者を誹謗中傷する内容だ。それが飽きたら、次は間違ったネタバレコメントを大量に流す。……。俺はアニメ本編とはまったく関係のない、そういうところも楽しみに、毎回このアニメを視聴していた。我ながら、邪悪な人間だと思う)

谷垣が下らない思いに駆られている間に、『テガミバチ』も終わりを迎えた。

(最後は、『鋼の錬金術師』だ。……。これは、TBSの日曜午後五時という時間帯に放送するアニメだが、俺はひそかにこの時間に放送されるアニメを「大河アニメ」と呼んでいた。出演者も豪華だ。主役に朴？美、釘宮理恵。ほかの出演者は三木眞一郎、折笠富美子、宮野真守、水樹奈々、堀勝之祐、内海賢二、うえだゆうじ、柿原徹也、名塚佳織、沢海陽子、中井和哉、三宅健太、吉野裕行、白鳥哲、高山みなみ、柴田秀勝、中村悠一、三瓶由布子、石塚運昇……。キャラクターが死亡したためにもう出てこないが、藤原啓治、井上喜久子も出ていた。そして、ナレーションも務める家弓家正。俺は家弓さんの大ファンだ。この人の声が聞きたいがために、『ラーゼフォン』を見たくらいだった。とにかく渋い。

悪役をやらせるのなら、家弓さんがいい。．．．．．今回は家弓さんは出番なしか。次回予告の映像を見ると、来週は出るらしいな）

気がつくと、アニメを見始めて、二時間近く経っていた。

第十三章 ニート、荒らし被害に遭う

谷垣直人は一目で自分のブログの異常に気がついた。コメントが大量についている。その数、三十五件。最初の一件は「東京法学生」が書いたものだが、残りはどうやら荒らしコメントのようだった。

(・・・何なんだこれは)

「死ね」

「死んでください」

「もまいのブログはツマラン」

「消えろ」

「チンカスが」

「クズみたいな文章晒して何が楽しいの？ ワロス」

「前科者ニート統合失調症のお前はもう人生おわってまーす。さっさと死になさい」

「お前才能ないよ。やめれば？」

「お前の書いたものなんて誰も読みたくないよ」

「痛い人がいますねw」

「香ばしいw」

「お前ホントは中卒だろ？ w 大卒なんて学歴詐称すんなw」

「廃人ニートは存在自体が犯罪です」

すべて谷垣に関する悪口が延々と書き込まれていた。だが、谷垣は冷静だった。常時精神安定剤を服用しているためだ。

（下らん。これも「東京法学生」の仕業じゃないのか。．．．．．荒らしコメントにどう対処するべきか。三十四件、多いな。ひとつひとつ削除するのも面倒だ。この際、もう放置しておこう。そうだ、東京法学生のアホにかましてやらんとな）

「東京法学生さん、とうとう荒らし化ですか？ 見苦しいですね。私はあなたなど、相手にしません。もう荒らさないように」

こんなもんでいいだろ。アホくさ。．．．．．おっと、忘れるところだった

谷垣はノートを一枚破り、ハサミを取り出した。また例の呪いの儀式である。

（まだ呪いの力が弱いのかもれないな。一体だけだと足りないん

じゃないか。二体用意しよう)

谷垣は紙の人形をふたつ作り、「死ね、死ね」とつぶやきはじめた。

第十四章 東京法学生、荒らし認定にも負けず

木杉勉は頭に来ていた。廃人無職青年がこともあろうに、この自分のことを荒らし呼ばわりしたためである。

（いくらなんでも無茶苦茶だろ、この人は。何で僕が荒さなきいけないんだよ。わけがわからない。とにかく反論しないと）

「廃人無職青年さん、僕は荒らしてません。人を荒らし呼ばわりとは、失礼にもほどがあります。撤回してください。また、僕に謝罪してください。」

確かに荒らしはいけません、僕は荒らされる側にも何か落ち度があるのではないか、問題があるのではないかと思っています。今回、あなたのブログが荒らされたのも、あなたのブログに荒らし依頼が出されたのも、あなたの発言が原因ではないのでしょうか？ 基地外などという差別表現を使うから、荒れるのです。今からでも遅くありません。基地外という表現を削除してください。そして、もう二度と差別語を使わないと、ここで約束して下さい」

（こんなもんでいいか。・・・何だかバカバカしくなってきたな。もうここに来るのはやめにしよう。やめにしよう、やめにしようと思ってもまた来ちゃうんだよな。なんでだろう？）

木杉は天井を仰ぎ見た。

「つまらんな」

悪魔はひとりごちた。

（何かが足りない。何がだ。……こうなれば、直接暴力に訴えるしかあるまい。原始的暴力こそ、愚かな人間どもを憎み合わせるのに最適だ。なぜ今まで気がつかなかったのか。俺としたことが、その手があることをすっかり失念していた）

谷垣直人はというと、のんきに昼寝をしていた。その様子を眺め、悪魔はほくそ笑む。

（谷垣、いよいよお前にも危機が近付いているようだ。昼寝をしていられるのも、今のうちさ。フッフ）

第十五章 悪魔の声

関根哲夫は目覚めるなり、パソコンの前に向かった。しかし、異常事態が発生した。スイッチを押しても、パソコンが起動しないのである。いつまでも画面は暗いままだ。

（どうなってる？ まさか、壊れた？）

その瞬間、関根の中で何かが砕け散った。

「うわああああああああっー！」

関根は近所迷惑も顧みず、絶叫した。すぐさま、母親がやってきた。

「ちょっと、あんたうるさいよ。静かにしな」

「うるせえ、クソババア、死ねえっー！」

関根は本棚から漫画本を掴むと、母親に向けて思い切り投げつけた。

「ひいっ」

間一髪、その一撃を母親は避けると、逃げ去って行った。

「なんでだー！　なんで俺ばかりこんな目に遭わなきゃいけない！　どうなってんだー、ちくしょうっ！」

机の上に置いてあるものを下に落とし、ゴミ箱を蹴飛ばす。

「パソコンが故障するなんて。もう俺は終わりだ。もう2ちゃんもできない、ニコ動も見れない。終わりだ。くそっ！」

「そうだな。どうしてお前ばかり酷い目に遭うんだろうな」

「!？」

関根以外誰もいないはずの部屋で、突然、聞き慣れない人間の声がこだました。

「誰だ。どこにいる。なに、どうして俺の考えていることがわかる。やめろ。俺の思考が読めるのか、か。」

「やめろー！ やめてくれ！」

関根は両耳を塞いでいた。

「哲夫、こんなもんじゃすまんぞ？ 二十四時間、お前に話しかけてやる。お前はこれから、俺らの声で眠れなくなるのさ。どうしてそんなことをするかって？ それは、俺らが悪魔だからさ。お前をこれでもか、これでもかと苦しめてやる」

第十六章 バタフライナイフをリュックに忍ばせて

関根哲夫は今までの人生の中で、一度も味わったことのない苦痛にあえいでいた。悪魔からの悪口攻撃、騒音攻撃である。それは四六時中続き、就寝したとて、事情は変わらなかった。悪魔の声は聞き覚えのある人物の場合も多かった。まず関根の父母、祖父母、中学高校時代の教師・同級生のほかは、有名人の声も聞くことができた。飛行機の爆音、けたたましい車のクラクションの音も耳にした。その内容は、とにかく徹頭徹尾、関根を誹謗中傷するものであった。

「ハゲ」

「中卒」

「ニート」

「ゴミクズカス」

「フニャチン」

「ヒキ」

「お前万引きしたろ？」

「お前痴漢もしただろ？」

「お前レイプもやっちゃったよな？」

「チビ」

「短足」

「ようクソ虫」

「ようウジ虫」

「お前クソ漏らしたろ？」

「お前小便漏らしたろ？」

「お前臭いわ」

「口臭すご」

「お前変じゃん？」

関根はそのたびに大声を張り上げ、暴れては、家のもの壊した。母親はびくつくばかりで、とうとう関根を置いてどこかへ出かけてしまった。

「ちくしょう。どこにいる、出てこい、ぶっ殺してやる、か。無駄無駄、お前には俺らの姿は見えんよ。俺らの姿を見てやる義理はないしな。お前程度、声だけで十分さ」

悪魔からの悪口を延々何時間も聞かされ、関根は次第に心身ともに疲れ始めた。暴れてあたりのものを壊す気力も失われた。関根はすっかり弱気になり、ただ悪魔からの罵りを耐えるだけとなった。

「哲夫、お前確かバタフライナイフを持ってたな。それを出せ、今

すぐ」

そう命令され、関根はかつて自分が護身用にバタフライナイフを購入したことを思い出した。

「哲夫、お前にいいことを教えてやろう。実は俺らは、ある人間にお前を呪うよう依頼されて、こうしてお前を苦しめているというわけさ。そいつが誰なのか、知りたくはないか？」

「教えてくれ！　いったい誰なんだ！？」

「お前も知っている男さ。無職青年だよ。奴がお前を呪っていたんだ」

「何！？　どうして……」

「お前があいつのブログを荒らすからだよ。その報復というわけだ」

「あいつめ！」

「さぞかし憎かろう。ならば、そのナイフで奴を殺せばいい」

「！？　そうだな！　これであいつをめった刺しにぶち殺してやる！　こうして！　こうして！　こうして！」

関根はナイフを握りしめ、何度も人を突き刺す動作を繰り返した。

「いいぞいいぞ、その調子だ。無職青年は今、新宿に向かっている。奴を殺すのなら、今しかないぞ」

「新宿か。よし、行くぞ！」

関根はリュックサックにバタフライナイフを入れ、手早く着替えると、リュックを担いで勢いよく部屋を出て行った。

第十七章 高校中退ニートは、京王線新宿駅西口前で叫んだ

谷垣直人はいつも通りの遅い朝食を食べている。ふと、今日は新宿へ行こうと思い立った。どこに行くかはまだ決めない。なぜだか自分でもよくわからない。

歯磨き、ひげそりをすませ、適当に服を選び、外へ出た。最寄りの京王線の駅へと向かう。途中の風景は見ているようで見ていない。そうこうしているうちに駅に着いた。切符は買わず、代わりにパスモを使って改札に入った。ホームに立って新宿行きの電車を待っている間、今日は新宿のどこに行くかと考える。といっても、大して新宿の地理に精通しているわけではない。

（とりあえず、ビックカメラにでも行ってみるか。DVD、CD、パソコンゲームのコーナーでもまわろう）

電車がホームに到着する。開くとほとんど同時に乗り込む。幸い座席が開いていたので座り、目を閉じた。目を開けていても、特に見るものもないからだ。

「新宿、新宿」

車掌がアナウンスを告げた。目を開け、立ち上がる。

京王線新宿駅の外に出ると、そこは通行人であふれていた。

（今日も人が多いな）

同じ頃、関根哲夫は悪魔の声の指示通り、新宿にいた。

「京王線新宿駅西口に行け。そこに無職青年はいる。ついたら、俺が誰か教える。そしたら、その得物で刺し殺せ」

「わかつた」

「返事はしなくていいぞ。俺らは思考を読みとることができるのだからな」

関根は焦っていた。もしかしたら、この機会を逃してしまうかもしれない。そんなのは嫌だ。今日、この場で俺が仕留めてやる。俺を悪魔に呪ったことを、後悔させてやると息巻いていた。自然と速足になり、次には走り始めていた。

「いたぞ。お前に向かって歩いてくる男だ。服装は」

「うおおおおおー！ 無職青年、死ねええええええ！」

関根は悪魔の説明を最後まで聞かずにリュックサックからバタフライナイフを取り出すと、絶叫し、そのまま猛然と走り続けた。

第十八章 東京法学生、刃物男を倒す

「長身で堀の深い顔立ちをした男が、無職青年だ。間違えるなよ」

関根哲夫は悪魔の声を頼りに、憎き仇敵である無職青年を必死の形相で探した。

「お前か！」

背が高く、日本人離れしたハンサムな顔をした青年だった。こいつに違いない。関根は駆けに駆けつけた。

「死ねっ！」

関根はバタフライナイフを手に、無職青年めがけて決死の突進を仕掛けた。

木杉勉は驚愕の表情を隠しきれなかった。自分がどうしてここに居るのかわからなかった。ただ、なんとなくふらりとやってきてしまったのだ。京王線新宿駅西口を歩いていたら、ナイフを持った男が自分に向かってくる。小柄で小太りの男である。

（な、なんだ！？ とにかく避けないと）

「うおおおおおー！ 無職青年、死ねええええええ！」

無職青年、死ねええええええええええ！」

谷垣直人は木杉勉の少し後を歩いていた。突然、自分のハンドルを呼ぶ叫び声を耳にしたので、驚いて声の方角に目をやった。

何だ？

よく見ると、刃物を持った男がこちらに向かって駆けよってくる。

（や、やばい。俺が狙われている！？ に、逃げよう！）

谷垣は慌てて新宿駅の構内に戻って行った。

「無職青年ー、よくも俺に呪いをかけたな！ お前にはここで死んでもらう！ あああああああ！」

そう叫び、小男は左に右に刃物を繰り出していた。そのたびに、木杉は何とか斬撃をかわしていた。

（無職青年？ 呪い？ 何のことだよ。とにかく、この場をしのがないと）

「聞いてくれ、僕は無職青年でもないし、あなたに呪いをかけたこともない」

小男の攻撃の間、木杉は説得を試みた。だが、無駄だった。

「うるせえ、死ね！」

なおも小男は刃物を繰り出してくる。

「くっ！」

説得を諦めた木杉は、攻撃に転じた。手にした傘を竹刀に見立てたのである。

「つきいー！」

男の喉めがけて、傘を突き出す。見事にヒットした。

「うげっ！」

男は激痛にたえかねて、喉に手を当てる。木杉はすかさず、手首を打つ。

「こてえー！ こてえー！ こてえー！ こてえー！ こてえー！
こてえー！」

男が刃物を落とすまで、幾度も手首を狙う。とうとう男が刃物を離した。木杉が男を取り押さえた。

「関根哲夫、情けない男だな、こんなにもあっけなく捕まるとは。まあ、お前のその貧弱な体つきでは、もともと誰かを襲撃するなど、

無理だったのかもしれんな。まあまあ楽しめたかな。ありがとよ、
関根哲夫」

「ま、待ってくれ、悪魔よ、俺に力をくれ」

関根が懇願する。

「うるさい！ 黙れ！」

木杉が一喝した。

「関根、お前はもう終わったんだよ」

悪魔が冷たく言い放った。

最終章 ニート、昼寝して夢を見て小説を書く

谷垣直人は自宅へ直行した。自分が襲われたのだ、どこかに寄ることなど、考えられなかった。自分の家へ帰って、緊張状態にある心と体を休ませたった。

谷垣は家に帰ると、布団を敷いて眠ることにした。

（まさか、俺が襲われるとは。もう、何も考えたくない）

谷垣は夢を見ていた。自分が何者かに襲われる夢だ。それも複数の男に。よく見ると、襲ってくる男たちは、全員背が低かった。谷垣はただ逃げ回るだけだ。とうとう包囲され、これから集団リンチにかけられそうだと思ったときに、目が覚めた。

気がつくと、時計の針は五時を指している。かなりの時間眠っていたようだ。

（そうだ、ニュースでやってないかな）

谷垣は急いでテレビをつけ、ニュース番組に見入った。

「京王線新宿駅西口で、大学生が刃物をもった男に切りつけられましたが、男は大学生に取り押さえられました。男は、無職関根哲夫、

二十九歳・・・・・・・・」

（捕まったのか。なにはともあれ、犯人が捕まってよかった。・・・それにしても、あのチビ、何者だったんだろう？ 本当に俺を狙っていたのか？ だとしたらなぜ？ ・・・わからない。もう考えるのはよそう。そうだ、さっき見た夢を小説のネタにつかえないだろうか）

谷垣は、夢の内容を忘れないうちに、ノートに書きとめることにした。

悪魔はせっせとメモ書きする谷垣を眺めている。

（谷垣、俺が用意したショーは楽しんでもらえたかな。本当はお前を関根に襲わせればよかったんだが、それではあまりに面白くない。そこで、お前をびびらせることにした。血相変えて逃げるお前は、見ていて愉快だったよ。今思い出しても、笑えてくる。・・・お前はいいリアクションをする。だから、まだまだ生かしておいてやろう）

「俺は・・・・・・・・。俺は、遊ばれていたのか？ 悪魔、そうなのか？」

警察署の取調室にいる関根哲夫が独り言を言っている。

（何をいまさらほざいてるんだこいつは。・・・・・・・・これにも、まだ使い道はあるな。今度はどうやって遊んでやろう）

悪魔は関根哲夫にどんな「悪戯」をするか、考えを巡らせた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4936j/>

悪魔とニートとその読者と

2010年10月15日00時18分発行